

『神聖考疑傍評私議』と『神聖考疑辨』

野 口 智 代

前稿『神聖考』と『神聖考疑』^(注1)では、西田直養『神聖考』と前田夏蔭『神聖考疑』を取り上げ、幾度か検討されてきた「神聖」について、二人の説を比較検討した。

本稿では、同時代の国学者である萩原広道が著した『神聖考疑傍評私議』及び西田直養と前田夏蔭の問答『神聖考疑辨』について検討していく。

一、萩原広道『神聖考疑傍評私議』

萩原広道が著した『神聖考疑傍評私議』^(注2)について見ていく。『神聖考疑傍評私議』は、『神聖考疑』と同じ弘化四年（一八四七）に完成した。萩原広道は岡山藩士で、弘化二年（一八四五）致仕、大坂に出て国学を教授し、著述に専念した。

萩原が『神聖考疑傍評私議』を書くことになった経緯は、その冒頭に記されている。

さきに西田氏の著れたる神聖考といふ書を見しに、予が所思とは異なるよしも有て全くも信あへざりしかど巻末に一言添てと乞ふ、まゝに、漢文一段を贅して其功勞を讀たりき。然

るを此度前田ぬしの疑ひ思はれて神聖考疑といふを著して、彼ノ神聖考を論はれたるを見るに、げに最いはれたる説多くして大かた論べきふしは無きに似たり。然れども此れはた予が初思ひ取るとは聊違へる事も有ルを、いはゆる先入の主となりたるけにや悉皆然有とも諾ひ難ければ、私に其ノ條どもを評して猶疑惑をはるけんとなすは、何れも世に所聞たる先生たちの記著されたる説なるをさし出で評せんはいとをこがましく罪得がましきわざにはあれど、此レは唯苟且なる事にもあらず。我大皇の天津神寶と座ませる御事なれば、俗の疑惑あらむは猶限なく可畏き事と思ふばかりに、私の憚をば打忘れてなん（句読点筆者。以下、本文の引用は『神聖考疑傍評私議』による）

萩原は初め、西田から『神聖考』を見せてもらっていた。西田の考えは萩原が考えていたこととは違ふところもあつたという。しかし西田から巻末に一言添えて欲しいと頼まれたため、漢文を一段書いた。萩原は自身の考えを書き起こすことはせず、心のうちに留めるだけにした。しかし弘化四年の四月、前田夏蔭が『神聖考疑』を著した。萩原はその書を読み、やはり自身が考えていたところとは違ふところがあつたという。そこで、萩原は私的に『神聖

考疑』の項目を批評し、疑問を晴らそうとした。

萩原は、前田が『神璽考疑』の中で誤写について述べたことについて、左のように述べている。

彼祝詞は其^{ツカエマツリナレ}の踐祚の式世々^{モトヨシ}行はれたる頃、忌部^{イムベ}氏人等鏡劍^{カミヤツギ}の事に奉仕^{ツカエマツリナレ}習^{マナブ}て専我^{センガ}氏人の預り知りて奉仕^{ツカエマツリナレ}れる神宝^{カンホウ}をのみ称^{アツカフ}て天降^{テンカウ}の故事^{コト}にさへ勾玉^{カドタマ}をいはぬやうになり来^{キタ}タれるは、忌部^{イムベ}氏の私^シのみならず、漸^{シタ}なべての世に古^コへ学の廢^{スレ}て古事^{コト}を遺忘^{ユヰウ}行^{ユウ}さまの見ゆる所にて然^{シカドモ}在^ア頃^{キタマ}に古^コルき祝詞^{イハヒ}の首^{ウタ}の文^{コト}を縮^{チヂム}めて今の如^{カキ}くには書^{カキ}成^セけむと思^{オモ}はる。(句読点筆者)

萩原は前田の説について、「鏡劍^{イハヒ}を称^{イハ}て玉^{タマ}を称^{イハ}ぬを忌部^{イムベ}氏人^{ウヂヒト}の自家^{ワガミ}を崇^{タト}く為^セんとて私曲^{シコク}のやうにいはれたるは意得^{イコエ}がたし」と納得していない。その理由として、「本来鏡劍^{イハヒ}のみなるを鏡劍^{イハヒ}とのみ称^{イハ}たれるが私^シといふ事は有^{アル}べくもなき事なるべし」と述べている。

では、『神璽考疑傍評私議』で、萩原の考えとはどのようなものであったのか。まず萩原は鏡劍について、鏡は石屋隠のとき天照大神の御像代として石凝姥神が作ったものであり、劍は素戔鳴尊が大蛇を斬ったときに尾の中から現れたものであると述べている。これら二つが天上に奉られ、そのことは『古事記』、『日本書紀』の両方に記されている。二書には勾玉を含めた三種が挙げられている。それに対し、後世の天皇紀には鏡劍の記述しか見られない。萩原はこの相違に疑問を抱いていた。

さて後世の天皇紀には鏡劍の記述のみしか見られないとあるが、実は鏡劍の記述も『開化天皇紀』まで見られない。最初に見られるのは『崇神天皇紀』からであり、そこには天照大神の形代である鏡の記述がある。劍の記述は、『景行天皇紀』に日本武尊に倭姫尊が草

薙劍を授けることが記されている。これが記述として見られる始める。

『古語拾遺』の崇神段に「故更令齋部氏率石凝姥神裔天目一箇神裔二氏更鑄鏡造劍以為護身御璽」とある。この「璽」は、後世までの皇位継承を示す神宝の記述であり、最初に見られる記述である。

しかし『崇神天皇紀』以降、鏡劍の記述はしばらく見られない。ただ『允恭天皇紀』には「即吉日選、跪天皇之璽上」と見え、『清寧天皇紀』にも「奉璽於皇太子」と記述が見られるようになる。だが『允恭天皇紀』と『清寧天皇紀』に記されている「璽」とは何を指しているのか判別しにくかった。後の『継体天皇紀』に見られる「大伴金村大連乃跪天子鏡劍璽符上再拜」によって、「璽」が「鏡劍」であるということがわかるのである。

先の『神璽考疑』でも述べたが、なぜ天皇紀により記述に相違が見られるのか。前田は、「璽」は三種神宝全てを示していると述べていた。対して、萩原は記述の相違について、『日本書紀』天皇紀を検討した。その検討の結果、一つの考えとして次のように述べている。

此^{コノ}鏡劍^{カミヤツギ}の二箇^{フタツツ}は天神御孫^{アマノミコ}の御系統^{ミミヤウシ}の信物^{シモノ}なる事は申^{ウタガハ}スも更^{さら}なれど、上古^{コノ}は萬事^{マンジ}大らかにして後^{シノ}世^セの如く何事^{ナニコト}をも際^{サマ}やかに分別^{フンベツ}せ給ふ事^{コト}有^{アル}ざりければ、其^{ソノ}信^{シン}とある御物^{ミモノ}をも御世^{ミヨ}御世^{ミヨ}ご^{ミヨ}には記^シルされずして多くは漏^{モロ}されたるか或^{アル}は又踐祚^{センソク}に鏡劍^{カミヤツギ}を奉^{ツケテ}るは常例^{ジョウレイ}なる故に、不意^{フイニ}く記^シし漏^{モロ}されたる。(句読点筆者)

萩原は昔は全てのことに対し大様であり、後世のように事細かに書き残すということをしなかったと述べている。そのため「しるし」についても、天皇の御世ごとに記されることがなく、多くは書き漏らされてしまったか、もしくは踐祚において鏡劍を献上するの

は常例であつたから、思いがけなく書き漏らしてしまつたのかもしれないと考へた。しかしそのように考えると、『古事記』、『日本書紀』に記されていることは、踐祚のときに忌部氏が奉つて儀式を行われていることすら知られず、余りにも内容としては粗いものではないかと指摘している。

更に萩原は鏡剣に「璽」字が使われていることについて、

璽としも称せる所由は、天神の御孫たる信物の意と所聞たるを、皇位の信物の如くなりしは崇神天皇の御世より後の事にぞあるべき。(中略)古事記また日本紀ノ一書にも此御鏡を天照大神と視はし給ひて齋祭給へと詔ひしやうにこそ記されたれ。此しを傳へて皇位の璽に為させ給へとは見えず。さるを崇神天皇其ノ神勢を畏みまして、倭の笠縫邑に移し祭り給ひて其ノ御世に石凝姥神天目一箇神の裔して更に造しめ給へる鏡剣を大宮中に留めさせ給へるより、次々の天皇たちに傳へ給ひて自然皇位の璽の如くにははけけらし。(句読点筆者)

初め「璽」は天照大神の子孫であることを示すためのものと考えられていた。しかし、次第に天皇の皇位を示すものとして「璽」の指す意味が変わつてきた。その時期は崇神天皇から後である。崇神天皇の御世に新しく作られた鏡剣の神聖さを畏み、内裏に留めたのである。それが自然と代々の天皇に継承されてゆき、そのため「璽」は天皇の皇位を次第に示すものとなつていったのである。

次に萩原は、勾玉の記述の有無について検討している。先にも述べたが、萩原は勾玉の記述が『日本書紀』の各天皇紀、『古語拾遺』に記されていないことについて疑わしく思つていた。

勾玉について、萩原は西田が『神璽考』の中で述べたように、天

照大神が石屋隠の際に作られた勾玉であると述べている。勾玉の記述の有無については、萩原は次のように考えを述べている。

(前略)鏡剣をのみ挙られて勾玉の事をば記されず。崇神紀にも天照大神を笠縫邑に遷し奉り給へる事のみなるが、劍は日本武尊の御事にて御鏡と共に笠縫へ遷し給へること著きを勾玉の事はふつに見えざるは諸共に遷し給へる歟。また鏡劍ばかりを遷奉り給ひて勾玉は猶御許に留め坐けるか。(句読点筆者)

崇神紀に鏡剣が笠縫邑へ遷されたことのみ記されている。勾玉の事が見られないことについては、一緒に笠縫邑へ遷されたのか、それとも勾玉だけは遷されずそのまま留めていたのかと述べている。そこで、萩原は尊崇していた本居宣長の『古事紀伝』の説を引用し、記述の有無について考察を加えている。

若本居先生の説の如く鏡劍をのみ離ちて笠縫へ遷し給ひ玉をば大御許に留められしならば、既に鏡劍と玉とは差異あるに似たり。もし又玉をも鏡劍と共に遷し給ひたるならば、後の神璽の御傳來は伊勢より奉られたる物とせんか、此しはた不審き事にはあらずや。(句読点筆者)

宣長の説のように鏡剣のみを笠縫へ遷し、勾玉を天皇の許に留めたなら、すでに鏡剣と勾玉の間には差異が生じている。もし勾玉も笠縫へ遷したならば、後の神璽の伝えは伊勢から奉られた物とするのか。このように萩原は述べている。しかし賀茂真淵が『祝詞考』で述べたことを『神璽考』も『神璽考疑』も受け入れ、宣長が述べた説を「根拠がない」としたことは間違ひであると指摘している。そして後世の有様により勾玉を無理に入れ三種と数えていると、萩原は考へている。

萩原は勾玉に「璽」を当てた初めは、『日本後紀』の「璽并劍櫃」であると指摘している。しかし、なぜ勾玉も三種の中に組み入れられているのか。『日本書紀』天皇紀や令式の一部の祝詞には鏡剣のみ記されている。『古事記』、『日本書紀』神代紀には勾玉の記述が見られる。このことについて、萩原は鏡剣とのみあり、勾玉のことが見られないことを踏まえて考え、次のように記している。

日本紀の撰者の御意にて後の制を古に及びて記し給へる例にはあらかとぞ思ふ。其ノ故は先御代々の紀はさらなり令式、古語拾遺にも皆鏡剣とのみ記された。勾玉をも鏡たる趣なるべくも見ゆれど、かくばかりの書ともに悉く漏さるべくもあらず。又文辭を省略も事にこそよれ。此れは主とある皇位の天璽なるを、一筆ばかりの事を略んとてさる大事を脱さるべきやうは有るべくもなき理なり。(句読点筆者)

『日本書紀』の撰者の意志で後のきまりを古代に及ぼし記された例ではないかと、萩原は指摘している。代々の天皇紀にも見られず、令式、『古語拾遺』にもすべて鏡剣とだけ記されている。これは「鏡剣」とある中に勾玉も籠められている趣があるのは見られる。しかし書物に悉く記されないはずはない。時と場合により省略することもあるかもしれない。だが、勾玉は主として皇位の「天璽」であり、一筆ばかりのことを省こうとして、このような大事を省くことはあるはずがないのは当然である。

それでは後世になるにつれ、勾玉が「璽」と称されるようになるのは何故か。この理由として、萩原は前田と同様に中国の様式に似せて記されたものであると指摘している。孝德天皇、天智天皇の御世から、代々奈良朝の頃までは全て中国風に似せていた。それが奈良朝の

頃より、次第に勾玉に限定して「璽」と称し始めたのである。

萩原は「勾玉」について鏡剣に次ぐ尊いものであるとし、それは『古語拾遺』に「矛玉自カラ徒フ」とあることを挙げている。これは鏡剣には劣るように思えるけれども、最も容易くない「天璽」であるということ述べている。

後世に殊に勾玉を「神璽」と言い、重要なものであるように言われたのは崇神天皇が新しく鏡剣を造られた際、鏡剣のみ践祚で奉り勾玉は御許に留めたためである。崇神天皇から後世は、殊に勾玉のことを「神璽」と言い、重要であるようにみられてきた。それは、前の通りの習慣に引きずられたためである。それにより、真淵は伊邪奈伎尊の御頸玉の例をあげた。対して、宣長は崇神天皇の御世に鏡剣は新しく造られた物であるが、勾玉だけは本来の天上の物であるため特別に尊崇されると説いた。西田はかえって鏡剣よりも勾玉の方が尊いように言い、前田は鏡剣は大嘗祭などの大礼に外へ出して奉るのを、勾玉はそのような事がないため尊いようにも言われ、一方で忌部氏人の私意であるようにもいわれたのであると述べたのである。

萩原は「璽」が指すものが、勾玉か鏡剣かと断定して述べていない。「鏡剣」を指す「璽」の場合、初めは天照大神の血筋であることを示すものであった。それが崇神天皇の御世に新しく鏡剣を造り、天皇の住まいに安置され自然と天皇の皇位の「璽」のようになった。それに対し勾玉を示す「璽」は、『神璽考疑』同様、代々中国の様式に真似て記していたものを、奈良朝辺りから勾玉に限定して「璽」と称すようになった。また崇神天皇の御世に新しく造られた鏡剣は、践祚の際に奉られたのに対し、勾玉はそのままであった。これによ

り後世には勾玉が重要なもののように思われ「神璽」と呼ばれるようになったと指摘している。

この萩原の著述が西田と前田の目に触れたのかは定かではない。少なくとも萩原の同書に触れた内容は出てこない。『神璽考疑傍評私議』から程なくして嘉永元年（一八四八）に西田と前田の問答が著される。この問答が『神璽考疑辨』である。

二、『神璽考疑辨』

次に西田と前田の問答である『神璽考疑辨』^(注4)を見ていく。『神璽考疑辨』は原本は現存しておらずその写しのみが残る。その写本の末尾に「嘉永元年」とあることから、成立は嘉永元年であると考えられる。『神璽考疑辨』の末に、

黒澤ぬしに托して前田ぬしへ示さむとて、書林に命じて写させしを、かく誤脱のみにて、其上余りに拙筆なれば、他にあつらへておくりぬ。（句読点筆者。以下、本文の引用は『神璽考疑辨』による）

右のようにあることから、西田は黒澤に前田から示された疑問についての「辨」として託したのでろう。「黒澤」とは、黒澤翁満のことであると考えられる。黒澤翁満は忍藩の武士、国学者、歌人である。山東京伝、曲亭馬琴とも交流があったが、のち国学を志し、賀茂真淵を敬慕して学問、歌作に努めた。財政的手腕を買われて藩の大坂蔵屋敷勤仕が長く、その間多くの門人に教授した。著作は歌集のほか作文書、注釈書、語学書など多方面にわたる。

黒澤は大坂蔵屋敷勤仕が長かったが、藩邸に住んでいたわけでは

ない。毎年欠かさず八月に忍を立ち、伊勢に立ち寄り、九月に大坂藩邸に着いていた。そして、帰りは翌年三月に大坂を立ち、伊勢へ寄り、四月又は五月に忍の家に帰り着いていた。西田との交流は、西田が大坂留守居の役職で大坂に居た時期と、黒澤の大坂勤仕との時期が重なることから交流はあったと考えられる。そして黒澤と前田の関係は、黒澤の『古己侶於保衣（文政十有三年寅正月改）』に「江戸下谷加藤遠江守様御屋敷前 前田賢助夏蔭」とあることから交流はあったと考えられる。

さて『神璽考疑辨』で主に述べられていることは、西田の『神璽考』で述べた「乃」と「及」の誤写説についてである。

まず一つ目に、前田は『大殿祭』の祝詞にある「天津璽乃鏡剣」とある「乃」の誤写について述べている。『神璽考』内で西田は、

大殿祭祝詞に「天津璽乃鏡剣云々」とのみありて、八尺勾玉の一種見えざるは省きもらすへきにあらず。必古事記、日本紀の皇孫命の天降の条の文に勾玉と鏡剣と三種をついてざる如く此祝詞も天津璽及鏡剣と有けむを、及字を乃字に誤れるより此誤字をうけて神祇令に凡踐祚之日中臣奏天神壽詞忌部上神字之鏡剣【義解曰、此即以鏡剣称璽】とある「神璽之云々」といへる之字は及字を誤れるの字より受来るにて、彼祝詞に天津璽といへるは八尺勾玉をいへるなり。（句読点筆者）

右のように述べている。このことについて前田は「うべなひかたけれ」としている。その理由として『神璽考疑』で前田は指摘しているが、西田の説は古書の例証のことを考えていないことと、勾玉一種に限定して「天津璽」と記している古書は見られないことを挙げている。

この前田の疑問に対して西田は、ことに「璽は神宝である勾玉の別称」という箇所にごだわり、間違ひであると反論する。西田の考える別称とは、天照大御神を「日神」、大汝命を「八千矛神」という意味である。更に、

阿麻津斯留志といふは一種に定めいふ名にあらずとはかの大
殿祭の乃は及字の誤りといふ処に心をつけれさりしよりの誤
りなり。元來勾玉のみをいふべきことなるを、後に轉りて鏡劍
にもおよへるなり。(句読点筆者)

前田が「阿麻津斯留志」を一種に定めている名ではない。」と指摘したことに對して、西田は「大殿祭」の「乃」が「及」字の誤りであるというところに目をつけなかったことを「辨」で挙げている。元々は勾玉のみ「阿麻津斯留志(天津璽)」と言っていたことが、後に鏡劍にも及んだと述べている。

次に二つ目として、各天皇紀に見られた「璽」、「璽符」、「璽印」、「璽綬」について挙げている。これら全ての文は、中国の様式で記された実際には役にたたない文であることを前田は指摘している。これにより西田の神璽の説は適當ではないと述べている。加えて「美斯留志」と訓をつけ読んでいるのは、神宝一種を指すのではなく神宝全てを指す言葉であるとし、改めて西田の「神璽」＝「勾玉」を否定している。

この前田の疑問に對し、西田は「辨」において、

書紀に出たる璽符、璽印、璽綬などいへるは、勾玉のことをからめかしてかけるなり。しか見されは、第一の神璽を御代／＼の日嗣の御大札に省きて鏡劍のみを以て儀を行はせたまふへきやうなし。(中略)さて又あなちに一物にはかきらぬ總称との

みいふ時は、いかなる故由のまし／＼て神璽をは省かせたまへりとかせん。考には引もらし、を、書紀持統天皇四年紀に春正月戊寅朔物部麻呂朝臣樹大盾神祇伯中臣大島朝臣讀天神壽詞畢忌部宿祢色夫知奉上神璽劍鏡於皇后即天皇位云々といふあり。此文には、璽字上に神字を加へられたれば、まきはしき事なく、勾玉をさして神璽といふこと明なり。しかれば後世に勾玉を専ら神璽と申ならへるによりて、おのかあなちおもひひかめたりとも定めかたきにや。疑説に神武天皇より下孝德天皇迄の間をおつる、まなくあつめられたるもの、此持統天皇紀なる神璽といふ事をはなど引もらされけん。また盜賊律第七に、凡盜神璽者絞【謂踐祚之日壽璽】云々と見えたる此神璽といふものは、疑説にいはれし總称のことくにもあらず。なほ勾玉一物をさしたりと聞ゆこの注に踐祚之日壽璽とあるをもて、おもへはかの神祇令なる神璽之鏡劍云々とある之字は及の誤りか、又は之字は撥入なるか、心づれにしても義解に以鏡劍稱璽としるされしはひかことなり。(句読点筆者)

「璽」の外に「璽符」、「璽印」、「璽綬」などと天皇紀に見られることについて、西田は全て「からめかして」いるからと述べている。「からめかして」書いているから、第一の神璽を御代御代の皇位繼承の大札において省き、鏡劍だけで儀式を行うという理由にはならないとしている。

同様に一種ではなく總称であると述べている前田の説に對し、西田は『神璽考』には引き漏らしていた『持統天皇紀』を引用し、「璽」字の上に「神」字を加えられたならば、紛らわしくなることはなく、勾玉をさして「神璽」ということは明らかであると述べている。「神

『聖考疑』で、前田は多くの天皇紀を引用し、西田の説を批判する証拠を並べている。しかし『持統天皇紀』の「神璽」を引き漏らしていたことを西田は指摘している。さらに『盜賊律』を引用し、そこに見られる「神璽」というものが「神璽考疑」で言われた総称ではなく、勾玉一種を指しているとともに自身を考えを述べている。「盜賊律」の注にある「踐祚之日壽璽」とあるのを考えれば、神祇令の「神璽之鏡劍云々」とある「之」字は「及」の誤りか、または「之」の文字は挽入か、どちらにしても義解に「以鏡劍稱璽」と記されていることは間違いであると述べている。

三つ目の疑問として前田は次のように述べている。

書紀繼體天皇紀に、大伴金村乃跪上天子鏡劍璽符とあるを、古事記傳にはさたかに璽符を勾玉の事とも鏡劍と指ともことわりあへず疑ひおかれつれと、是亦天子の璽符の鏡劍と云意にて記されたるは明けきをや。其璽字は、上にもいふことく、唯ひろく斯留志と云義に用たるにて、天津斯留志とは三種神宝をすへいふへき汎称なり。ざるを勾玉に限りて璽と云るやうになれるは漸後世の意なり。然改めたるにて、寧樂朝より後に云始めたる事そとおもはるゝ。(句読点筆者)

『繼體天皇紀』の「大伴金村大連乃跪上天子鏡劍璽符」について、『古事記傳』には「璽符」を勾玉のことか鏡劍のことかどちらを指しているのかについて断言はせず、疑問に留めている。しかしこれが「天子の璽符の鏡劍」であることは明白である。「璽」は広く「斯留志」という意味に用いている。「天津斯留志」とは三種神宝の全てに言うべき総称である。それを勾玉に限り「璽」と言うようになったのは後世からの意味である。このように改められたのは奈良朝より

後であると、宣長の『古事記伝』の引用も含めて前田は指摘している。

この疑問に対し西田の「辨」は、「劍鏡璽符」と続くときは、順序は乱れるけれど三種全てが揃っていると理解できる。常例とは異なるが、三種神宝は奉るはずである。しかし、『書紀』繼體天皇紀の文はその内容にこだわらず書き記されているためよくないと、述べている。

そして、

天孫降臨の時、宇内を馭めたまふへき料に大御神より授りたまひし三種を一種はふきて大札をおこなはせたまふへき理なし。又勾玉にかきりて璽といへるやうになれるは、奈良朝より後にいひ始めたるやうにいはるれと、持統天皇紀に奉上神璽劍鏡於皇后とあれば早く藤原の朝にいへりしこと論なし。(句読点筆者)

西田は一種を省いて大札を行う理由はないと述べている。そして前田が奈良朝から専ら勾玉のことを「璽」ということになったという説について、先にも引用した『書紀』持統天皇紀に「奉上神璽劍鏡於皇后」というところから早くとも藤原朝からであろうと指摘している。

次に最後の前田の疑問である。

又直養の説に、彼祝詞に天津璽及鏡劍と有けむ及を乃と誤れるを受けて神祇令に神璽之鏡劍と記されたる故に、即位の大儀行はるゝにも鏡劍の二種をのみ用いられて勾玉を残さるゝ事になれるは、甚口をしき事なるよしに云るはいといみしき僻心得の妄説なり。彼養老の令條は大宝令を刊脩せられたるにて、其大宝令は近江朝廷の令を改定られたるなるへし。近江朝の令は今傳

はらされは考知へからぬとも、令條の制奈何てか祝詞によりて建らるへき。且神祇令は天皇踐祚の日の式を云文なり。彼祝詞は皇孫命天降坐る故事を云辭にて、互に相か、つらひなき事なるをや。(句読点筆者)

西田の説である「及」を「乃」と誤った誤写説は、酷い妄説である。前田は批判している。その理由として、養老令は大宝令を省き収めたものであることを挙げている。その大宝令も近江朝廷の令を改めて定めたものである。なぜ令條のきまりが祝詞により成り立つのか。また神祇令は、新しい天皇が皇位を継承する日の儀式をいう文である。西田が例として挙げた『大殿祭』の祝詞は、皇孫命が天降るときのお故事を言う文である。そのため、二つには関係性がないことを指摘している。

これに対し西田は、まず令條の決まりがどうして祝詞により成り立つのかという前田の指摘について「言うまでもない事」とし、祝詞により成立したというように考えることが間違であると述べている。

おのれは文字の誤りをうけられしよとそいひたれ。よしや祝詞の文のさたはともあれ前にもいへることく同公(藤原不比等、筆者注)の撰なる律に神璽といふことありて、注に踐祚之日壽璽とあるにて令の方は愆文なること明かなり。其上持統天皇四年なる神璽劍鏡とつゝけて記されしにて即位はさら也。朝賀其余事とある大御礼の時には、三種ともに用いたまひしこと明なり。そもく道理をもておすときは、千歳の古といへともはかり知る、ものなるを、此駁者はいかなる道理あれはか大札に神璽を省きて、劍鏡の二のみにて式をおこなはせたまふに

やとの疑をは起されさりけん。其疑たにおこりなはおのか乃字は及字の誤りといふ説をは尤とおもはるへし。さはいへ、大儀の時かうやうの故ありて璽をは省き、劍鏡の二種もおこなはるといふこと、又継体天皇と持統天皇との御世のみに、三種をそろへらる、故なりといふ事の證物にみえたらましかは、この駁論をはかたしけなくうへなふへし。又踐祚の日と降臨の時と相か、ることなき事は、いふまでもなけれど、降臨の時に三種ともに持下りたまひしなれば、踐祚の式を二種にておこなはせたまふといふ理はなしといふ處をむねとはいへる也。もし降臨の時、大殿祭の祝詞のことく璽なくて劍鏡の二種のみもち下りたまふにきはまりたらは、おのかか、る一大疑論をおこなはるへし。これなんおのか疑の眼目にはありける。(句読点筆者)

前田の説に対して西田は祝詞の文はともあれ、律の文は令と共に藤原不比等が撰んだものである。律に「神璽」とあり、注に「踐祚之日壽璽」とあるから、令の文が誤つたものであることは明らかである。加えて持統天皇紀に「神璽劍鏡」とあるから、即位の際は言うまでもない。朝賀その他の大御礼の際には、三種共に用いられていたことは明らかである。そもそも道理をもつて推測するときは、昔のことといえども、見当をつけて知ることができる。それをなぜ前田は、どのような道理があるのか大札において神璽を省き劍鏡の二つのみで式を行うのかという疑問を起さなかつたのか。この疑問さえ起こせたなら、「乃」字は「及」字の誤りという説は「その通りだ」と思われるだろうと西田は述べている。また「実際に大儀のとき、このような理由があつて璽だけを省き、劍鏡の二種をもつて行われるということ、また、継体天皇と持統天皇の御世のみ、三種

をそろえた理由はこれであるということの証拠を見せたのなら、前田の反論をありがたく認めよう」とも西田は辨で述べている。また、踐祚の日と降臨の時に関係性がないことは言うまでもない。降臨の時に三種とも持ち下ったのならば、踐祚の式を二種で行わせる理由はない。西田はこの点を趣旨とし、『神璽考』の中で述べたのである。

以上が『神璽考疑辨』である。前田は終始「璽」が指すものは勾玉一種ではなく、神宝全てであるということを主張している。それに対し西田は、『神璽考』に引き漏らしていた『書紀』持統天皇紀を挙げ、「神璽」が勾玉のことを指していると改めて述べ、前田の疑問を退けている。

二人の論争はこの時限りと思われ、この後には見られない。両者の論争は些細なことであり、意見の相違は平行線のままである。西田の考えは、これまで真淵や宣長さえ断言せずに行っていた「璽」という問題について、誤写ではないかという新たな考えのもと踏み込んだものであった。しかし西田の論証にはいくつも不備があり、考証を基本とする国学という学問からは認めがたいところがある。西田の説は古書の例を見ても、その上で新しい考えを述べている。基本的な部分を疎かにしている西田の説を前田が批判したことは当然である。ただ西田の説は後の国学者に影響を与えていた。実際いくつか書を確認することができた。後世に見られるということは、その点では西田の考えは画期的であったということが言えるであろう。

注

- (1) 野口智代「『神璽考』と『神璽考疑』」(本誌 第三十号、二〇二一年一月)

- (2) 萩原広道「神璽考疑傍評私議」は鈴鹿文庫本を底本とした。引用に際して、漢字は通行体に改めた。

なお、山崎勝昭氏は『萩原広道 上』(ユニウス、二〇一六年)の中で『神璽考疑傍評私議』を『神璽考疑同傍評私議』の成立として述べられている。題の記述の相違について、山崎氏は西尾岩瀬文庫所蔵の萩原自筆稿本「神璽考疑同傍評私議」を底本に引用されている。この書の題簽には「神璽考疑同傍評私議」とある。しかし論文名は、『神璽考疑傍評私議』であり、書名と論文名が紛らわしく注意が必要であると指摘している。山崎氏の考えは、前田の論文「神璽考疑」及びそれを評した萩原の論文「神璽考疑傍評私議」を併載したということである。山崎氏はこれを丁寧に記せば「神璽考疑・神璽考疑傍評私議」となり「神璽考疑」の繰り返しを「同」で承けたと指摘している。この指摘から前田の論文も併載しているものであり、従って「神璽考疑同傍評私議」は、萩原編著ということであると山崎氏は述べられている。

- (3) 市古貞次ほか『国書人名事典』(岩波書店、一九九三年)

- (4) 西田直養・前田夏陰「神璽考疑辨」は多和田文庫本を底本とした。引用に際して、漢字は通行体に改めた。

- (5) 注2に同じ。

- (6) 『渡辺刀水集二』日本書誌学大系四十七(二)(青裳堂書店、一九八六年)の『黒沢翁満』によれば黒沢翁満と交友のわかる『古』に偁る

(7)

保衣』という書付があり、前田夏蔭の名前が記されている。

『神璽考』の影響を受け後世記された書は、わかっているものだけで次の通り。

堀直格『三種神符考』（万延元年（一八六〇）八月）

黒川春村『神璽考便蒙』（万延元年九月）

著者不明『神璽考斥非』（成立時期不明）